

## ■特別寄稿

# 身体表現ということ

## 体験的随想

遠藤善久

私がバレエに魅せられて町の稽古場に通い始めたのは十八のときだった。私はその頃、人生に何の確かな目的もたず、漠然と青春の甘い幻想と心の焦躁を身を感じながら、街の雑踏を往き来していた。

そしてそんな或る日、偶然見たバレエが、その後の私の人生を大きく変えてしまったのであった。初めて見たバレエの何がそんなにまでも私を踊ることに駆り立ててしまったのだろうか。一瞬のうちに私の心を奪ってしまった私がそのとき舞台から感じたものは一体何だったのだろうか。私は二十数年踊り続けて、末だにそのとき舞台から感じた強い感動を、自分の踊りのなかに求めあぐねているのである。

私がそこに見たものは……

そこでは人間の最も美しいと思われる運動が繰り広げられ、踊るものの手足は自由に四方の空間に伸びて解放され、踊るものの喜びや悲しみの表情が、それらの運動と渾然と融け合っていた。そしてその世界は、私が観客席の片隅で、唯呆然と傍観者でいることを許さなかった。そこで繰り広げられるダンサー達のどんなに小さな仕草もが私の目を奪った。彼等の手足は自由にものを喋るようであり、彼等の跳躍や旋回は、言葉では表現出来ない歓喜の表情にあふれているようであ

った。

私の心は強い力で彼等のそんな演技に引き寄せられ、私の身体は舞台の上で自由に動きまわる彼等の肉体に同化してしまふような錯覚を感じたのだった。

私は幕の降りてしまった無人の観客席で、強い感動に襲われ、暫くは席を立つことができなかった。そしてようやく街の雑踏に飛び出してからも、異常な興奮と痺れるような陶酔が身体を去らなかったのを覚えていた。

その時からバレエは私の心を強く把えて離れなかった。

暫くして、バレエを始めるにはあまりに重い私自身の肉体を顧みることもせず、ただバレエへの止みがたい欲求に駆られて町の稽古場の門を叩いたのだった。

バレエでは通常、舞台で踊れるまでにその成長期において約十年の修業を必要とする。そしてそれは勿論毎日の稽古をすることである。しかしそれは、今沢山のダンサーの卵を前にして思うことであり、その時にはそんな自分の踊ることの先々の可能性など何も頭になく、唯この世界でなら何か自分が熱中出来るものをきっと見つけられるに違いないと思ったのであった。

私は何の抵抗もなく、子供達の無限の可能性を秘めたしなやかなタイツ姿に混じってバレエの練習を始めた。私はあの舞台に見た非現実の世界の行きずりの旅人としてでなく、その世界に腰を据える住人となるべく、目の前で軽々と足を上げる子供達の間で重い足を一センチでも高く上げようと、日々のバレエの稽古に熱中した。

そして数年後には、私にとっては早すぎた初舞台のチャンスがやってきた。それは帝国劇場での古典バレエ「ジゼル」であった。初舞台といっても勿論その頃の私のキャリアでは踊らせてくれるはずもなく、唯舞台を横切って、音楽に合わせていくつかの仕草をするだけの役であった。しかし私は初めて上った舞台で、数千の観客を前にして、その時自分の身体に起った恐ろしい舞台上りを一生忘れることはできないであろう。慣れない化粧と、重い衣裳に身を包み、不用意に舞台に飛びだした私に、突然目を眩むような光の束が襲いかかってきた。そして数分後には、やっと光に慣れた私の足元に、無気味な沈黙と闇とが広がり、そこに私は無数の身を射るような冷やかな視線を感じたのだった。突然の銃声に気を失い失墜する鳥のように私のあらゆる筋肉細胞は硬直し、私の足はリズムを失い、

一歩たりとも前に進むことが不可能に思えた。多少なりとも訓練されたはずの私の身体は、初めて経験する舞台上りに、舞台に立ち止まることさえできないのではないかと思ったのである。私の身体は人前でものを表現するにはあまりに未熟であった。長い時間が経ち、呆然と立ちすくむ私の前に重い緩帳が降りてきた。

以後私はいつも舞台の前になると、その時の恐ろしさを思い出し、果して自分があの眩いばかりの光の束のなかで身も心も自由に踊ることができのだろうか、自分の意志でその瞬間に自分の身体に起る、あの忌わしい変化を制御できるのだろうか、私の身体が無意識のうちに舞台に対して用心深く身がまえてしまうのを感じるのである。

私は出発においてそのような体験から、身体でものを表現する者にとって、いかに日々自分の身体における肉体と精神の自己陶冶の努力が必要であるかを思い知らされたのであった。その結果、私は日々の生活においてなるべく無心を心掛け、ことに舞踊的行為の前には、できるだけ雑念を捨てて、自分を白紙の状態におくようになった。

私はある振付師の前に立つ。振付師は常に多かれ少なかれ暴力的である。私は無心でその暴力者の前に立ち、自分の肉体を一つの精巧な機械としてその前に置く。振付が始まり、何時間かはものを考えるひまもなく動作の反復が続く。そしてその動作がようやく一つのリズムを持ち、そこに一つの形が現われてくると、その暴力者は私から去っていく。私の肉体にはその暴力者の形だけが残され、私は孤独な自分の動作の反復のなかで、私に乗り移ったその新しい形と対話を始め

る。それは知らない土地に旅し、初めて出合う人々と話を交わすときのような新鮮さで私の心把える。そしてそこに少しでもこれから生れようとするまったく新しい創造の手懸りを握むと、私の身体には何ともいえない精気が漲ってくるのである。

これは踊りが振付師から一つの形として舞踊家に渡され、そして舞踊家の身体においてそれが一つの表現となっていく、一般的な舞踊の図式であるが、まさに舞踊家にとって身体が白紙であるということは、これから絵を描こうとするものが真白なキャンパスを必要とするのと同じように大事な条件なのである。そうでなければその舞踊家は、いかなる振付家からも信頼されず、また常にそこに新しい創造を期待する観客からも喜ばれない、単に自惚れの強いスタジオでしか約に立たない舞踊家になってしまうのである。そしてそうした舞踊家の踊りは、常に表情に乏しく、見るものに何の楽しさも与えず、唯ぎこちない非音楽的な時間をそこに感じさせるだけなのだ。

踊ることで一たび表現したいという心の欲求が自分の身体の動作に移ると、その踊るものの動きや表情は非常に自然なものとなり、見るものを些かも窮屈にさせず、しかも見るものの目を逸させない。それは遊びにみる子供達の動作に似て、伸び伸びとした解放感を感じさせる。しかしそれは何の努力もなしに子供達の動作に自然に現れる、まったく天性の表現とは自づと別のものである。そして踊りの名手は、あたかもそんな子供達と同じような容易さで苦もなく自分の身体を空間に浮ばせて、見るものに鳥と思えるような表現をも可能にしてしまうのである。あらゆる舞踊表現の根底にはそういういった人間の肉体を空間に解放したい

という願望が隠されているのである。訓練された舞踊家の四肢は鈍舌な役者の言葉よりも有弁でなければならない。そしてその動作の流れ、止まり、空間に広がっていく様子は見るものに妙なる音楽を聞かせ、その瞬間に立ち止まるポーズは一つの見事な影像とならねばならない。そして踊りの名手に見るその動きには、それほど多様な表現が同時に一つの身体のなかに実現されるのである。

あらゆる表現には自らが行為する喜びとそれを他者に伝える喜びとがある。音楽家は自ら演奏して音楽を楽しみ、聞くものにもその楽しみを与える。芝居での役者は自ら様々な人間として生れ変わる喜びと、それを見るものに理解させる喜びとを持つ。そして舞踊においては最も多くの人間がその喜びを共有出来るのである。言葉はそれを習得することによって初めて一つの表現になる。そして音楽や絵画に於いても、それが一つの表現になるためには、それぞれに固有の技術が必要とする。しかし踊る楽しみのためには数分間努力すればよほどの音痴でないかぎり、すぐに盆踊りの輪に加わることができるのである。

舞踊の批評ほど気楽なものはない。ほとんど全ての人が、様々な次元で踊りを理解することができるし、また自分自身で表現することもできるのだから。しかし一たびそこに舞踊家なり振付家の研ぎすまされた創意が発揮されると、踊りの表現ほど複雑多様に変化したその表現が高められるものもはかにないのである。そのような踊りを見るものを選択し、限られた客人をしか寄せつけない。ということは見るとの理解によつては、それらの踊りの奥に隠されている、真の創意

なり、表現の根元に触れることが出来ないということである。勿論それはあらゆる表現に起る当然の現象なのだが、踊りにおいては見る者に様々な想像を掻き立て、また見る者の感じ方によって様々に解釈されるものもないのである。舞踊家は批評家を信用しない、というよりも舞踊の批評家は多くの場合、自分がはめた舞踊家の一ファンといったほうが当たっているのである。踊りにおいてのそんな幅広い理解のされ方は、踊りが常に、いかに振付師が脇でじたとしたとしても、踊るものの身体を通してしか実現されない表現であり、そこに振付者と踊るものの二重の心が現われてくるからなのであろう。そしてもし踊るものが自分で振付をした表現においてさえも同じことがいえるのである。踊る心と振付をする心とは、一舞踊家の身体においてもまた別の作業なのである。しかも踊りは音楽同様時間に制約された表現であるために、運動のその瞬間にしか存在出来ず、いかに優れた踊りの名手といえども、寸分狂わぬ演技を二度繰り返すことなど不可能なことなのである。そしてそんな踊りの表現というものが、私には一瞬にして夜空に輝き、一瞬にして燃えつきてしまふ火花のように艶やかであり、空しいものにも思えるのである。

身体表現というものは、ほんとうに魔術のようなものである。私は始めてバレエを見たときのことを思い起す、というよりも常に私の心の隅に残るその感動が、こうも私を長く踊り続けさせているので、思い出すというよりも、それに全てを照応させて考えてきた、というべきか、とにかく私が初めて見たバレエから受けた感動は、まさに与えられたものではなく、その時の私の心の渇きが、舞台での踊りを通して勝手につく

り上げた想像によるものなのだ。踊りを見るものの心にそれ程深く入り込み、また見るものをそれほど強く夢と想像の世界に誘う要素をもっているのである。

また舞踊は見るものとの中途半端な出会いを嫌う。

それは見るものと見られるものが身体を通してじかに感じ合う踊り独自の現象によるものである。そしてそのような現象は人間の平常の動作からも窺うことができる。恋人同志はたとえどんなに離れていても、その肌お互いの存在を感じ合い、立ちどころにその距離を縮めることができる。そして嫌な奴に出合えばその言葉とは裏腹に、表情は忽ちに嫌悪なものとなり、二人の間には深い溝ができてしまう。そして子供達の動作ではそれが一そう顕著なものになる。子供達は我慢することや隠すことをしないので、直接肌で感じたことは、すぐにその動作や表情となって外に跳び返ってくるのである。そんな人間の動作や表情に起る現象は、私に踊りにおける人格を考えさせる。舞踊において、その卓越した技術や天性の肉体の美しさだけの表現にどれほどの重みがあるうか。平素のほんのちょっとした仕草や動作にさえも、それほど簡単に表に現れてしまうその人間の在りのままの姿を、もし舞台上の上での舞踊家と考えればその舞踊家がいかに巧みにその技術でそれを覆い隠しても、ものを見ることのできる目は、いとも簡単にその舞踊家の人格を見透してしまふものである。舞台の上で踊るものは決して全ての観客の目から、その身も心も逃れることはできないのである。それは踊るものに限らず、身体でものを表現する全てのものについていえることであり、そのような自然なくしては舞台人として、その厳格な儀式の場である舞台に上る資格をなど持てないのである。

私は二十数年踊ってきて、その間いくつかの振付も手懸け、また今沢山の舞踊家の卵たちとも付き合いつながら、身体でものを表現するものにとって必要なこととして、演技者としては常に無心で踊りに挑み、生きることににおいては少しでも己の人格を高め、そしてものを創造するにあつては、広い知識を豊かな感性に満ちた暴力者であらうとすることを、日々自らの舞踊生活に問いかけていたのである。

私は最近、踊ることの長い経験から、ますます自分の身体が、いつも一つの観念的な状態に陥つてしまふことを恐れるようになった。そして自分の身体がそういう状態を感じると目を閉じて意識の解放を祈るばかりである。バレエでの表現は、特に人間の肉体を極限にまで運動させ、その肉体の機能を拡大させることを必要とし、また踊るものにそれを要求する。したがって踊るものは、自分の肉体が周囲の騒音や、また自らの雑念によって起る心理的な動揺をひどく嫌うようになるのである。そしてそのようなほんの小さな踊るものの心の動揺が、その踊るものの身体を、梔子でも動かない石のようにも重くし、また自由に空を飛び廻る鳥のようにも軽やかにするのである。

石のように重い動作は、それぞれの長い人生において一つの観念の殻に閉じこもってしまい、そこから逃れることのできなくなってしまう大人達の想像力に乏しい身のこなしを想わせ、鳥のように軽やかな動作は、子供達の素晴らしく個性的で、しかも表情に富んだ運動を想わせるのである。

私は日々稽古場で、子供達と踊りを通して接することとに無上の楽しさと新鮮な喜びを感じる。そしてまた子供達の何気ない日常的な動作から、自分が踊るこ

とでの多くのことを教えられようような気がするのである。

子供達の日常の動作は、その心において何の観念や雑念に束縛されることもなく、また大人達が必要とするほどのものを表現するのに多くの言葉が必要としない。子供達にとって動くということは、舞踊家が踊るということと同じであり、喋るということは意味を伝えることよりももっとずっと音楽に近い叫びのようなものなのである。そして子供達が遊ぶときの動作や叫びには、すでに大人が失ってしまった物事に対する尽ることのない興味や好奇心が満ちており、そのことが子供達を止むことを知らない、精気にあふれた運動に馳り立てるのである。子供達のそうした動きには、常に次に何が起るか分らない、論理を超えたインスピレーションが働いているように思われるのである。そしてそんな子供達の状態は、私が踊るときにいつもそうでありたいと思っている無心の状態と同じなのだ。

そういう状態にある人間の身体というものは常に次に起こることに對しての万全の用意をその内に備えている。そして一たん事が起った場合の反射神経によるその動作は想像以上に素早いものである。私は子供達が遊びの瞬間に見せる様々な動きに、走るライオンを見る思いがする。

私は時々子供のバレエを振付けながら、いかに自分の振付けがすでに一つの観念に捕われてしまった、どこもない表現であるかを、そんな子供達のスピードに乗った動作によって思い知らされるのである。子供達のそんな無意識の動作は、まさに舞踊そのものであり、私の振付けに限りない啓示を与えてくれるのである。

すでに論理によってしかものを考えられず観念によ

ってしかものを見られなくなった私は、もう一度そうした身も心も開かれた子供達の世界を見ることによって何とか自分の踊りをとり戻そうと思うのである。

私は、踊りは目的のない散歩者の足どりのようなものだと思っている。目的のない散歩者はこれから何処に向うかも知らず、留まることもなく、唯歩くことに無上の楽しみを感じているに違いない。そんな散歩者の足どりには自然にその喜びのリズムが伝わってくるはずである。散歩者の目には何度も通ったはずのその道々での景色も、一日として同じには映らない。それは彼等散歩者が、日々己の内に感じている自由と自然のなかで刻一刻と移り変わる物事への開かれた目を持っているからであろう。

その道々に用意された自然の風景は、そんな彼等の心の故郷であり、彼等は自分の心をその風景に照応させることによって、そこに新しい第二の自然といった想像の世界を予感しているのである。

日々己の肉体を限界まで酷使しても、踊るもの達に何の報酬もない。そして踊るもの達は始めからそのような報酬とか物事への欲望など持っていないのだ。唯踊ることが好きであり、唯身体を動かしていれば、そこに生きることの無上の喜びや価値を感じているだけなのだ。それは散歩者が風景を通じて予感する新たな創造への期待と同じように何ら具体的な目的に向っての行為ではないのである。

散歩者は先を急がない。そして彼等のあらゆる仕草、道々で野の花に差しのべる手も、行き交う人々に投げかけるその視線も、現実とはかけ離れた表情を持っている。そこには踊るものの手足と同じように、何の目

的も有用性も持たず、唯行為する喜びのみがあるのだ。

平常の人間の動作には常に何かの目的が伴う。ものを取ろうとする手の動き、何処かに急ぐ足どり、雑踏で人を探す目の動き。それらは確かに人々が無意識にその動作に現わす自然の表現ではある。しかしそれらの目的を持った動作は、それぞれの生活の制約のなかで必要から生れた動作でしかないのである。そしてそのような動作のもつ表現は人々の注意を引くはずもなく、まして心を奪う性質のものでもないのである。

生活のなかで用を足す人間のちょっとした動作も、踊りのなかで舞踊家が表現する身のこなしも、その形においては全く自然に外に現われてくる人間に共通の動きである。だが舞踊家がその表現のなかで行う動作は、舞踊家が動作そのもののなかに生きようとし、動作そのもののなかに己の生命を同化させようとする行為から生れてくるものなのである。そのことが舞踊家の動作にいいようのない美しさと表情の輝きを与えているのである。そして舞踊家に限らず、日々その行為に生命を照らしている人の動作には、自づとそれぞれに固有の、一瞬にして人の目を奪ってしまう動きの美しさがあり、精気に満ちた表情があるものなのだ。

私は経験を積んだ大工の棟梁の鉋さばきにも一つの舞踊を見、巧みに船を操る漁師の櫓さばきにも一つの踊りを見る。踊りは人間の生活のいたるところに在り、そしてそこに在る人間達の全てを映し出している。

舞踊家に限らず、あらゆる人間の身体の表現には、そうした人間の全人格が隠されることなく、その表現現われてしまうのである。

(舞踊家)